

ロシアにおけるスタインベック

称賛と非難を語る（一九六五年）

ジェイムズ W・タトルトン

森 政 勝 訳

ロシアにおける文芸批評は、いずれも党の公式な方針に沿っているので、合衆国に対するソビエト政府の態度は、合衆国の作家に対するロシアの批評を通じて比較的正確に表示されうる。ジョン・スタインベックがロシアの評論界でどのように認められるかは、ソビエトとアメリカの政治問題のおおよそのパロメーターと考えても差しつかえない。ロシア人がスタインベックに会う時彼をどのように評価しようとも、評価の中心となるのはもちろん「怒りのぶどう」である。これはスタインベックの最初の小説ではないが、大抵のロシア人はこの作によって初めて彼を発見したのである。

わが国で「怒りのぶどう」が出版された一九三九年は、ソビエトの合衆国に対する態度がまさにひどく変ろうとしていた。一九三〇年代も初めのころは、ロシアの批評家たちは、どのアメリカの作品も社会主義的写実主義——これは将来のユートピア的社会、すなわち彼らの説く「差し迫った」プロレタリア革命によって到達できる社会への途を文学を通じて指示する責務を負ってきたものである——の目標に接近していないことを非難していた。スターリンは一九二九年、アメリカの共産党支部について語り

「革命の危機は切迫している」と予言し、また彼は「アメリカの共産主義者は政權獲得のための来たるべき戦いには指導権を握る用意のあることを要求した⁽¹⁾」。ロシアの政治乃至は経済の理論家は——マルクス主義の立場からアメリカのあの大不況をはるか遠方から眺めて——資本主義がその最も強力なとりでの中で内部的に崩壊することを予言した。しかし、一九三〇年代の初めのころは、ロシアの批評界はアメリカ文学がプロレタリア的世論の拡大を支持すべきであると主張していたようであるが、その間徐々にではあるが、ソビエト連邦には「一九三〇年の中ごろから終りにかけ、資本主義体制を暗黙裏に批判したに過ぎない作品も大目に見ようという傾向の増大⁽²⁾」が現われていた。歴史を「大目に見ようという」マルクス主義的論理には、スタインベックのような批判的写実主義者の手になる小説はぴたりと適合し、そのため「怒りのぶどう」は称賛されるに至った。さらに言うならば、資本主義をもっぱら暗黙のうちに批判したアメリカ小説に対するソビエトの批評態度の変化——これはソビエトの文芸批評家の予期もしなかったものようである——すなわち、この新しい歴史的事

情は、スタインベックをして第二次世界大戦中のロシア人に非常な親しみを持たせるに役立った。

「怒りのぶどう」がソビエト社会主義共和国連邦で続き物として連載された一九四〇年には、ドイツのファシズムの脅威とヒットラーの不可侵条約締結の失敗とが、アメリカ資本主義、引いてはアメリカ作家に対するソビエトの批判を和らげさせた。アメリカはプロレタリア革命をやることはできないにしても、せめてファシストという共通の敵に対する連合国の一員として名を重ねることぐらいはできたであろう。かくて、アメリカの小説家への称賛の美辞がソ連で聞こえ始めた。このような異常事態の中で「怒りのぶどう」はロシアに姿を現わしたのであった。ロシアの一九四〇年の図書出版は総計二五、〇〇〇。冊に過ぎなかったが、一九四一年には「怒りのぶどう」は三〇〇、〇〇〇部に達した。他のいかなるアメリカ作家も、ソ連ではこの作ほど数多く単独印刷をされたものはなかった。⁽³⁾

ロシアにおけるスタインベックの小説の人気を高めるに役立った歴史的状況は別として、なぜ「怒りのぶどう」がロシアで成功したかという非常に本質的な理由を引証することは困難ではない。スタインベックの「資本主義批判」、土地を追われたオーキーたち〔訳者注——かんばつなどで農地を失ったアメリカ中央部地方の移動農民〕の種々な問題の描写の写実性、オーキーたちの単純、勇氣、はげしい自負心、生れた土地への断ち難い気持とその気持に対するスタインベックの個人的な思いやり、ジョード一家の難渋と悲哀を描きながらもこの小説の根底にある楽天主義——このような本質的特性が早速ロシアの文芸批評家に感銘を与えることになった。オルガ・ネメロフスカヤはズベズダで次のように評している。「ジョード家は滅亡し、作中人物はいずれも悲運であったにもかかわらず、この小説

の結末は楽天的である。すなわち、資本主義も労働者の高潔な人間感情を破壊することはできないということである。この小説は人間の精神と意志を鍛錬し、将来の不可避的決定的な階級闘争への備えをさせる」⁽⁴⁾ この小説は共産党の方針にはっきり従っているのではないが、一九三〇年代の終りから一九四〇年代の初めごろの大変な寛容なロシアの批評家から受けられるに充分なほど資本主義を批判している。P・バラソフが言うように「スタインベックは種々な変化が徐々に起りつつあることを知っており、またその変化に脅されるのはだれであるか、この変化と革命を恐れているのはだれであるかも知っている。階級意識の目ざめ、新しい見解や思想の出現、『わたし』から『わたしたち』への、『わたし』の土地という言い方から『わたしたち』の土地という言い方への変移、全く同一の不幸に捕らわれている人びとの緊密な同志関係の出現——これらは現にスタインベックが格別の関心をよせているものであり、彼の小説に明確な革命への方向と力強さと新鮮さとを与えている」⁽⁵⁾

不可避的なことながら「怒りのぶどう」はアースキン・コールドウェルの「タバコ・ロード」と比較されたが——これはスタインベックには有利であった。ちょっと考えられないことであるが、「怒りのぶどう」は、またマクシム・ゴーリキイの「母」と比較された——ロシアにおけるゴーリキイの世評を考えると、この比較もまたスタインベックには名誉なことであった。ジョード家の母、トム、ジム・ケイシーは——特に解説的ないくつかの章は——心からなる称賛を受けた。ゴーリキイの「母」の女主人公のように、ジョード家の母も「厳しい生活を物ともしない日々の雄々しき、現実への次第に深まる理解、悲しみに耐えるすばらしい才能、さらには、苦しみを受け入れる心の用意」⁽⁶⁾を示してくれた。トムは伝統的民族的な主

人公たるべき者の素材にされた⁽⁷⁾。ジム・ケイシーは一人の作中人物として成功しているが、このことについては批評家の意見はまちまちであった。クメルニーツカヤはその成功の原因について「ケイシーの描写の大胆、特異、真実性は、スタインベックが思想と表現の慣習的な方法を手放さないようにして、一人の説教師〔訳者注——ケイシーは説教師であった〕を純粹に革命的な宣伝家に創り変えた事実こそ存する⁽⁸⁾」と論じた。種々論争のあった中間章についてネメローフスカヤは「このような章は面白味のない社会経済的な論文ではない。それは強烈で、しかも叙情味のある芸術的ジャーナリズムの一つの型で、小説そのものにも劣らず感動的である。その烈しく、叙情的な言葉の調子は終始心に鳴り響き、鳴りやんで、冷ややかな理性的分析などは決してやってはいない⁽⁹⁾」と論じた。

前記の言説は、ロシアの批評家がプロレタリア小説への審美的関心に次第に気を取られていることを暗示する。ウォールター・ライドアウトが評したように「表現形式や手法の実験がなされるのは、ソ連の作家連合が表現形式や手法を『ブルジョア的形式主義』であるとして敵意をこめた攻撃をしたからであった⁽¹⁰⁾」が、多くのプロレタリア文学に見られる歴然たるぎこちなさは、ロシアの評論家をして、一九三〇年代の初めに公式化されていたような、評論界の要求するもの——社会主義的写実主義——を再評価させた。このような緩和的態度は文学の表現形式と手法に対する革命的作家の国際連合の漸次緩和されてゆく「純粹主義的な」態度と符合する⁽¹¹⁾。「怒りのぶどう」に対するロシアでの批評の一般的な趣意はバラソフの「この作中の単純な人びとの中に：スタインベックは人間の根源的な特質——品位の感覚、人間性の信頼——を見いだしている⁽¹²⁾」という発言の中に要約されうるであろう。

「怒りのぶどう」の与えた衝撃のため、ソビエトの文芸批評家は、当時まだロシアでは出版されていなかったスタインベックの初期のすべての小説を見返えるようになった⁽¹³⁾。しかし、スタインベックの初期の作品——『蛇』、「天の牧場」、「知られざる神に」、「トーティア平」、「はつかねずみと人間」——の大部分に表わされている人間観、社会観は社会主義的写実主義の教義とはもちろん両立しないし、従って多くのソビエト人には受け入れられないものであった。病的な作中人物、精神異常者、生物学や性への極度な執心——このようなものは革命的批判の原理には適応しなかった。一九三七年には早くも、ある批判家は、「おぼつかない戦い」に出てくる共産主義者でストライキの指導者であった人たちはもっぱら「宣伝的」であり、労働者たちは「頼りにならない⁽¹⁴⁾」ものであった、と述べた。しかし、一九四〇年にはA・アブラモーフはこの考え方に異議を申し立てた。スタインベックの経歴を振り返りながらアブラモーフは次のように論じた。スタインベックが「現実の世界も考えず、また、真に歴史的な、あるいは社会的な実在性も考えない、ささやかな人間の個人的な幸福という、彼の以前のテーマ」から抜け出したのは「おぼつかない戦い」だけであった。「彼はそこで初めて、有り触れた人間感情の小さな世界の限界を越えた。——愛情や友情はスタインベックにとっては唯一の価値あるものであったらしい——そうして彼は社会的感情、集团的勇氣、憎悪と意志力の世界を示している⁽¹⁵⁾」。

さて第二次世界大戦の直前には、ロシアの批評家は大体スタインベックの小説をほめていた。小説家たちが「おぼつかない戦い」と「怒りのぶどう」に関心を示したため、何かすばらしい事が起きそうであった——もともと、仮にスタインベックが性と生物学と退廃への執心を忘れてしまった

らのことであるが、とにかく戦わねばならない戦争があった。ロシアでは人員も物資も戦争のために動員されたため、一九四〇年以後のソ連ではスタインベックの作品はほとんど出版されなかった。『赤い小馬』は一九四三年名文集に収められ、「月は沈みぬ」は、戦時中に翻訳出版された⁽¹⁶⁾。しかし、この後者は一般的な失望を買った。連合国の士気を鼓舞し、連合国をして反ファシズム闘争に勇気を振るわせるのが、作家たるものの第一義的な責務であるとロシアの批評家が考えていたころ、スタインベックは人間に対して余りにも哀れみ深かった。彼はドイツの将校連の動物的な心理を理解することもなく、彼らを余りにも人間らしくし過ぎたのであった。「彼の取扱うファシスト的人物たちは充分明瞭には浮き出されていない。かといって、彼らがあらゆる非人間性乃至は怪物性を持っているように表示されているわけではない。彼らに抵抗するノールウェー人もやはり感傷化されている⁽¹⁷⁾」とある批評家は不平を述べている。ノールウェーにおけるファシズムへの抵抗は充分には描写されていない、とその国の人たちは非難した。「ブルジョア民主主義のバラ色の夢」をみながら死んでゆく市長は過去への後退と見なされた。クニポビッチが論じたように「自由を愛好する人びとのファシズムとの闘争をもっぱら取扱った当代の西方文学のすべての作品の中では、戦前のヨーロッパの生活が、社会的矛盾もなければ、社会的困窮や葛藤もないバラ色のユートピア王国にも似た田園風景として描かれている⁽¹⁸⁾」。実のところ、ソビエトにおける一般的な不平は、スタインベックをはじめ、他のアメリカのプロレタリア作家が国際的社会主义に対する第二次世界大戦の裏面の意味を公平に批判しなかった、というものであった。わが国の文学は敵に対して全面的に動員されることもなかったし、戦争努力の激しさにもかかわらず、社会主義的写実主義の規範

からすれば、第一流といわれるアメリカ小説は生れなかったと、アメリカのプロレタリア作家たちは論じた。

ドイツへの勝利が確実になると、ソ連政府は一九四五年合衆国の参戦目的に対し、再び公然と疑念をいだき始めた。フレデリックC・バーフアン教授はその著「ソビエトにおける合衆国のイメージ、その変り方の研究」の中で、スターリン主義的政策が、連合国に新しく加わった一国のイメージを偽り伝えたのであり、ソ連が全面的に強くなっている際に「冷たい戦争」を引き起こすようになった若干の条件を生ぜしめたのであった、と明言している。戦後のこの期間スタインベックは、ロシア人からの最も辛辣な論評の攻撃を甘受していた。たとえば、一九四七年ソビエト社会主義共和国連邦の高等教育省全連邦講演局後援のモスコイ講演で、M・メンデルソンは、スタインベックを以前から批判していたロシア人が忘れることになかった非難——「スタインベックは人間の生物的な面をうんざりするほど強調している⁽¹⁹⁾」という非難を公けにした。スタインベックは「おぼつかない戦い」や「怒りのぶどう」で描いているような将来の見込みを踏まえ、て行動することもなく、次第に反動的になっていった。スタインベックは「缶詰横丁」では、アメリカの社会秩序の不正に非常に強力な抗議をやるうともせず、マックや少年たちやドーラのベア・クラブという店にいる少女たちを用いて、一団の怠惰な浮浪者と売笑婦——彼らは現在の社会機構に満足し、それを換えようとも思わない——を描写している。ロシアの批評家は大体、「缶詰横丁」の中に、「物質的な幸福を追求し、常にどん欲で我欲の強いアメリカブルジョアの实体」への反抗の要素のあることを知っていた、がこの小説はやはり非難された。オルロバはこの小説を「生活の実際的矛盾を飛躍したもの⁽²⁰⁾」と称した。この小説はアメリカの社会体制

を暗々裏に批評してはいるが、結局それは頂けない、とメンデルソンは不満を述べた。「しかし世界には、いや実のところアメリカ自体でも、どんな欲があれば、それに抗する努力があり、国民に禍をもたらす我欲があれば、それを破棄しようとする熱望があることをよく知っている読者、このような読者は、スタインベックが良しとした全き無関心さを歓迎することではできない、とわれわれは繰り返して言おう」⁽²¹⁾。「缶詰横丁」はアメリカが戦争している間に書かれたが、「その中では戦争のこともファシズムのことも何一つ書かれていない」⁽²²⁾と言ってメンデルソンは酷評した。この作が失敗した唯一の説明可能な理由は、「缶詰横丁」が「スタインベックの第二次世界大戦の性格を評価する無能力、国内の反動と国外のファシズムとの関係についての不十分な理解、アメリカの真正な反ファシズム信奉者を是認できなかったこと、などから生れたもの」であった。「スタインベックは錯雑で常なきアメリカの現実性という事実に当惑して、自分自身のからの中に隠れ、世界に行なわれているあらゆる事柄に目をふさぎ、様式化されて興味深い浮浪者や奇行に富む人びとの群の中に避難しようとした」⁽²³⁾。

その翌年スタインベックは「ロシアの農民や労働者や商人たちと話をし、彼らを理解し、また彼らの生活状態を見、わが国の人びとにその報告をする」⁽²⁴⁾ため、ソ連を訪ねていたが、その時モスコウの作家連盟のある代表者は、スタインベックに、最近の作品が冷笑的に思われるが、と不平を言った。その時のスタインベックの返答は述べる価値がある。「別に冷笑的ではありません：作家の仕事の一つは、その時代をできる限り理解し、それを書きとめることだと信じています。現にわたしはそうしているのです」⁽²⁵⁾。しかし、マルクス主義的批評家にとっては、一九三九年から一九四八年までの間に書かれたスタインベックの小説は「われわれの時代のアメリカ文

学の中に非常にはっきりと現われている精神の退廃状態に彼が屈した」⁽²⁶⁾という明らかな証拠となったのである。このように非常に不満があったのでハリー・レピンは一九五〇年、そのエッセイ「当代アメリカ作家へのあるヨーロッパ的考察」の中で「ソビエトの批評基準から判断すれば、いかなるアメリカ作家も資本主義的帝国主義の卑屈な追従者である、と指摘される公算が、そのころには大きかった」⁽²⁷⁾という決論を下さざるを得なかった。

スタインベックの場合このような観察は正しかった。一九五四年Y・ロモノバは「『気まぐれバス』とか『あかあか燃えて』という脚本のようなスタインベックの最近の作品の多くは、実生活中に見たものを、その時代に強力に再生できる作家がどこまで墮落できるものかを、そうしてその時の無理もない困惑、腹立たしさ、つらさなどをしばしば感じさせている。『エデンの東』という小説ではこの墮落が限りなく続けられている」⁽²⁸⁾と述べた。ロモノバは「放火、自殺、二件の毒殺、二件の殺人、さらに二件の殺人未遂、それに、淫売婦の『生活』の一連の光景」に不満をもらし、スタインベックの意図は「人間に奴隷の心理を持たせるように失意、不信、服従……の種子をまく」⁽²⁹⁾ことであつたと論じた。これとは違った別の理由から、アメリカの批評家がしばしば、スタインベックの戦後の小説につれなく当たっていたころ、デミング・ブラウンは、スタインベックの小説に対する戦後のロシアの批評の中に、一人の作家——彼は社会主義的写実主義の客観性を持つに十分な見込みがあつたにもかかわらず、それを果たし得なかった——⁽³⁰⁾が自分の衰えを「心から残念がっている様子」が見られると言っている。

スタインベックの作品に対して次第に変わっていくロシアの態度は、スタ

リン主義時代の前後になされた「真珠」に対する反ばく的な批判に最も鮮明に例証されている。一九五三年I・ティホミロバはスタインベックの短編小説が「読者を麻痺させ、ふ抜けにし、悲観主義の毒液で毒し、人間への嘲笑と憎悪を接種」⁽³¹⁾しようとしてしていると論じた。ティホミロバは「真珠」が「幸福をねがう人間の希望の全き空しさ」⁽³²⁾を知らせようとする唯一の目的をもって、インディアンの苦しみに満ちた生活を取扱っていると主張している。しかし、スターリンの死は、ソビエトのアメリカ作家一般への、特にスタインベックへの批判的態度を暖かいものにした。十年の間に初めてスタインベックの小説の新版が出された。事実「真珠」は一九五六年と一九五八年に翻刻もされ翻訳もされた。ソビエトの冷ややかな態度が、和らぐと批評家たちは、スタインベックの「素朴な人間尊敬」と、その物語りが「不正義と圧迫への烈しい怒り」⁽³³⁾を喚起する力、とを強調しているようであった。ごく最近ある批評家は「真珠」に含まれる「三様の意味」を説明した。すなわち「キーノーは略奪者と戦って敗北した。彼はわれわれの世界の無力で『弱小な人間』を代表している——これがこの小説の本来的な社会的写実的な面である。キーノーは——一般の人から見れば——ばかげてはいたが、誇り高いことをやって、この敗北から立ち上がった。これがこの物語りのもう一つの心理的な面である：のろわれた真珠を海中に投ずることで、彼は自分一個の破局が自分の内に人間というものを取り戻したことを：知ったというのである——これが、この小説の第三の主要な道徳的寓話的な面となっている」⁽³⁴⁾。さて「真珠」のこのような批判は、ブラウンがいみじくも言ったように「一変した時代を雄弁に物語っていた」⁽³⁵⁾。

ソ連の批判的見解が漸次増していった最初の一つの微候は恐らく、ス

タインベックが戦争直後ロシアを訪門した際、彼自身によって目撃されたであろう。モスコフの作家たちがスタインベックに敬意を表して催したある晩餐会でのあいさつの際、スタインベックはロシア人の聴衆に向い、自分とロバート・カーパは「政治体制視察のためではなく、普通のロシア人に会うために来たこと、しかもすでに多くのそういう人びとに会ったこと。そうしてわれわれは目にした事物について客観的真理を語ることであればと思ったこと。エイレンバーグが立ち上がり、われわれがもしそのようにすることができたら、ロシア人は大変喜ぶであろうと言ったこと。テーブルのはずれにいた一人の人が立ち上がるなり、真理といってもいろいろあること、しかもロシア国民とアメリカ国民の親しい間がらを促進させるような真理を語らねばならないと言ったこと」を語った。スタインベックによれば、「この発言が悶着を起すことになった。エイレンバーグはツト身を乗りだして荒々しい言葉を吐いた。作家に何を書くべきかを告げるのは侮辱であると彼は言った。ある作家が真理に忠実であるという評判をとったら、その人にはいかなる示唆もなすべきではないと彼は言った。彼は同僚の顔めがけて人差し指を振って見せ、君の態度は宜しくないぞ、というような主旨のことを言った。シミノフは即座にエイレンバーグを支持し、最初の発言者を公然と非難した。するとその発言者は自分の立場を弱々しく弁護した。その時チマルスキ氏が発言しようとしたが、その論戦は引き続き行なわれていたため、彼の声は聞きとれなかった。われわれは、党の方針は作家の間でも大変厳しいものなので、どんな論議も許されないことをいつも聞かされていた。しかし、この夕食時のふん囲気では、前述のようなことが、仮にも真実であるとは思われなかった。カラガノフ氏は両者を調停するような発言をし、やがてこの夕食の興奮も静まった」⁽³⁶⁾。

スタインベックのための晩餐会にチラと散見された党方針の緩和は「レビドバ——この人の小説家の処遇は、スタインベックの同国人の手になるいかなる批評より大変同情的である——」の最近の批判に明白である。レビドバは、ロシア人のスタインベック批評に含まれている矛盾性を率直に直視し、この小説家のためになるよう同情の念をもって結論を下している。「四〇年代の終りと五〇年代の初めごろは、わが国の評論家は、スタインベックがイデオロギー的にも芸術的にも退廃しており、その著作がデカダンの、自然主義的、かつ好色文学的でさえあるテーマに満たされていると言われ、また、動物性、病理、冷笑などの微候を持っている、という見解をとっていた」。しかし、レビドバは続けて言う。「この作者の場合、この冷笑ほどに典型的ではない特性を探することは困難であろう。というのは、冷笑はつねに、もしそれが本当のものであれば、徳儀の慢性的墮落——これはスタインベックの場合には決して真実なものではなかった——の目じるしであるからである」⁽³⁷⁾。スタインベックには、徳儀の墮落に対するロシアの冷戦的非難が当らないばかりでなく、彼は人間の徳儀的責任を主張すべき主要なスポークスマンである、とさえいわれている。「というのは、ある程度彼は他の『偉大』なアメリカ人たちと同じような特殊な声——三〇年代に力強く響いたあの声——でしゃべっており、彼はやはり彼らに共通している不幸な問題——すなわち、われらの時代の非常な錯雑さのため、彼らが陥っている情緒的な、いや正確に言えば知的な、混乱——を同じようにかかえているからである。スタインベックの作品に見られる人本主義的反ブルジョア的な情緒の調子は、ずっと不変のままであったが、大戦後書かれた著作にある哲学的底流は、徹底的に生物学的な『認識』⁽³⁸⁾から人間の徳儀的責任の痛感への変移を反映している」。レビドバによれば、「真

珠」、「気まぐれバス」、「あかあか燃えて」、「エデンの東」などはいずれも「戦後のスタインベックが執心した観念、すなわち、善と悪の闘いにおける人間の個人としての徳儀的責任についての熟考」⁽³⁹⁾を反映している。「缶詰横丁」でさえ「おちゃめな小物語、叙情的道化、喜劇的田園詩と呼びうる」⁽³⁵⁾ことを、レビドバは認めている。スタインベックを弁護して、レビドバはピーター・リスカの「ジョン・スタインベックの広い世界」とウォレン・フレンチの「ジョン・スタインベック」を取り上げ、この両著が、この小説家を公平に評していない箇所のあることを責めている。また、レビドバは「エデンの東」や「われらの不満の冬」の性格描写には定見がないと言っているが、彼の評言も究極的には称賛の評言である。「澄みわたった良識を持ち、人間について種々な観念を明るく持ち続け、いまだに世界に充滿している邪悪と悲哀から目を離すことを好まず、また、そうすることの出来ない、かつまた（多分彼の最も魅惑的な属性であろうが）生ける万象への無量の愛情を一杯持ったような作家、そんなスタインベックは困難に満ちた行路で勝利を収めたり、敗北を喫したりしたのであった」⁽⁴¹⁾。ソ連では、将来スタインベックの評判がどうなっていくかは予言できない。ソ連でのスタインベック批判は幾分「和らぎつつ」あるらしい。というのは、ノーベル賞をもらったスタインベックが、実のところ、ロシア人には、下積みの人間の権利の老擁護者であるように思われたからである。スタインベックがプロレタリア作家として強圧的に利用されるのを拒否していることについては、ロシアの評論家の間に、あきらめの気持さえ次第に高まっているのかも知れない。これを要するに、スタインベックが社会主義的写実主義に身を委ねていると断言することはむづかしいであろう。というのは、スタインベック自身は自分の「非目的論的思考」が、本来的

には、「当然あるべき物、あるいは、可能でありうる物、あるいは、ありうるかも知れない物とではなく、むしろ現実的に『ある』物と関係しており——そうして、なぜにではなく、なにをあるいはいかにしてという以前からの難問にせいぜい答えようとしている」と主張しているからである。しかし「おぼつかない戦い」と「怒りのぶどう」がいずれも「ある社会的経済的体制によって起される人間の苦しみに反感をいだき、そのような体制が根本的に変革されることを唱道する」⁽⁴³⁾という意味での急進的小説であると、アメリカでは、一般には考えられていないとしても、この両作はロシアでは愛情をもって今でも記憶にとどめられている。政治事件の流れが、この愛情を変えるかどうかははっきりしない。党の方針が再びきつくなることはない⁽⁴⁴⁾と確信できるわけのものでもない。

このような事情については一九五〇年に出たフレデリックC・バーファ教授のスターリン主義分析に関するエッセイ「ソビエトにおける合衆国のイメージ、その変り方の研究」の中ですでに記述されていた。バーファ教授とスタインベックの二人の人生行路は全く偶然、一九六三年一月のモスコイまでは同じであった。十一月一三日西の世界は、政治学とソビエト研究で知られるエール大学教授のバーファンがその前月の一〇月逮捕され、合衆国へのスパイ容疑で外部との連絡を禁じられた、というニュースを受けとった。何故に彼が逮捕されたかは、アメリカでは未だに充分には知られていない。幸い彼はケネディ大統領や外交界、教育界の多数の知名の士の口添えで釈放された。スタインベックは文化交流の行なわれていたころ丁度ロシアにいた。彼はバーファン教授の逮捕によってショックを受け、劇作家のエドワード・オールビーと共同で新聞記者団との会見を呼びかけた。「当局はわたしを逮捕すべきであった。当局がスパイ活動と呼

ぶ事情を信ずるなら、わたしの方がずっと罪が大きい。というのは、わたしの方がはるかに多くの質問をし、はるかに多くの国を見たからである」と、スタインベックが言ったといわれている。ワルシャワへ出発する前夜スタインベックは「ソ連邦と西方の間の『ドアは開かれつつある』」⁽⁴⁴⁾と言った。しかし、今やそのドアは閉じられた。アメリカ人がここに来ないように忠告したい、とわたしは言うであろうと思う」と言った。

スタインベックの受けたショックの激発が、彼の小説に対するロシアの批判にどんな影響をもつかは予言できない——しかし、多分何もないであろう。彼がモスコイを去る時でさえ、彼の戯曲「月は沈みぬ」がモスコイで上演中であり、ソビエトの報道通信社のタスによれば、それが「今シオン中、最も興味深い戯曲であった」ということを知るのは皮肉である。その演出をやったベニアミン・ツガンコフは、この戯曲が現代調と熱烈な反戦的テーマと「疑いもなく明らかな芸術的特性」⁽⁴⁵⁾をもっていたので、自分が選択したものであった、と報道記者に語った。スタインベックの公けの所説がロシアにおける彼の作品への批判に何らマイナスの影響のないようにと願われる。しかし、それがどうであろうと、スタインベックの反響はすでに記録にとどめられている。「ロシア紀行」で彼が述べているように「アメリカ人とロシア人の相違は、作家に対するばかりではなく、その国の体制に対する作家の態度に最もよく現われている。というのは、ソ連では作家の仕事はソビエト体制を鼓舞し、解説し、あらゆる方途をつくして、それを前進させることであるからである。ところがアメリカとイギリスでは、立派な作家は社会の番犬である。その仕事は、社会の愚かしさを諷刺（ふうし）し、その不正義を攻撃し、その欠陥を指弾することである。……そうして、魂の建築家として作品を書くことが、社会の番犬として書く

ことと同じほど偉大な文学を生み出せるかどうかは、時が経たないとわからない。今日までのところ、建築家の一派は偉大な一編の作品も生み出してはいないことを認めなくてはならない。⁽⁴⁰⁾

注

- (1) Walter B. Rideout : 「一九〇〇年と一九五四年、合衆国の急進的小説、文学と社会の相互関係」一四〇ページ
- (2) Denning Brown : 「一九三〇年代のプロレタリア文学に対するロシアにおける批判」二二ページ
- (3) Glenora W. Brown と Denning B. Brown : 「アメリカ文学のロシアにおける翻訳物案内」一九五ページ
- (4) 「愛と憎しみについての書」ズベスタ、八一九号、二七三ページ
- (5) 「人間の怒りをうたう人」新しい世界、一〇号、二二三ページ
- (6) F. Chelovekov : 「怒りのぶどう」文学評論、一二号、三八ページ
- (7) Tamara Khmel'nitskaya : 「スタインベックの怒りのぶどう」文学的現代人、一二号、一五七ページ
- (8) Khmel'nitskaya, 一五九ページ
- (9) 「愛と憎しみについての書」二七四ページ
- (10) Rideout : 二二二ページ
- (11) Brown : 「アメリカのプロレタリア文学に対するロシアの批判」二二ページ
- (12) 「人間の怒りをうたう人」二二四ページ
- (13) Glenora W. と Denning Brown : 「アメリカ文学のロシアにおける翻訳物案内」一九五—一九六ページ
- (14) N. M. : 「ジョン・スタインベック『おぼつかない戦い』」世界文学、四号、二二二—二二四ページ
- (15) A. Abramov : 「ジョン・スタインベック」世界文学、三—四号、二二三—二二四ページ
- (16) Glenora W. と Denning Brown : 「案内」四二—四三ページ、一九五—一九六ページ
- (17) M. Mendelson : 「当代アメリカ文学のソビエト的解説」二二二—二二三ページ
- (18) E. Knipovich : 「ジョン・スタインベックの『新本』スナーミヤ、五一—五二、五三—五四、五五—五六号、一四一—一四二ページ

- (19) 「当代アメリカ文学のソビエト的解説」一七—一八ページ
- (20) R. Orlova : 「備人教育」新しい世界、三号、二〇三—二〇四ページ
- (21) Mendelson : 一六—一七ページ
- (22) Mendelson : 一五—一六ページ
- (23) Mendelson : 一七—一八ページ
- (24) John Steinbeck : 「ロシア紀行」(バイキング版)、一五—一六ページ
- (25) 「ロシア紀行」二七—二八ページ
- (26) Mendelson, 一七—一八ページ
- (27) Margaret Denny と William H. Gilman 編 : 「アメリカ作家とヨーロッパの伝統」一七—一八ページ
- (28) 「スタインベック氏の哲学」文学新聞(一九五四年七月一〇日付)四—五ページ
- (29) 「スタインベック氏の哲学」四—五ページ
- (30) Denning Brown : 「アメリカの作品に対するソビエトの態度」一六—一七ページ
- (31) 平和、民主主義、社会主義のために反動的開化主義者と戦う」ズベスタ、一一号、一六三—一六四ページ
- (32) 「……と戦う」一六三—一六四ページ
- (33) D. Zhantiyeva : 「ジョン・スタインベック」の「後記」ゼムチュジーナ、七四—七五ページ
- (34) I. Levidova : 「ジョン・スタインベックの戦後の著作」文学の諸問題、八号、(ソビエト評論、IV、八—九ページ)
- (35) 「ソビエトの態度」一七八—一七九ページ
- (36) 「ロシア紀行」二二七—二二八ページ
- (37) Levidova : 二二—二三ページ
- (38) Levidova : 二二—二三ページ
- (39) Levidova : 二四—二五ページ
- (40) Levidova : 二六—二七ページ
- (41) Levidova : 二八—二九ページ
- (42) John Steinbeck と Edward F. Ricketts : 「ローテズ海、旅行と調査の気ままな日誌」一三五—一三六ページ

- (43) Rideout : 一二ページ
- (44) Henry Tanner : 「スタインベックとオールビー、ソビエトで合衆国の教授のために大いに語る」 ニュー・ヨーク・タイムズ (一九六三年一月一日) 一ページ、五ページ
- (45) 「称賛されたスタインベックの戯曲」 ニュー・ヨーク・タイムズ (一九六三年一月十五日) 五ページ
- (46) 「ロシア紀行」 一六四ページ。ソビエトの作家を魂の建築家と呼んだのはスターリンであった。